

札幌開発建設部における 「かわたびほっかいどう」の取り組みについて —令和4年度の取り組み内容と今後の展開—

札幌開発建設部 河川計画課 ○白田 峻曹
村上 泰啓
渡辺 元之

北海道開発局では第8期北海道総合開発計画の主要施策における「世界水準での観光形成」の一環として、河川空間を活用した北海道の新たなツーリズムである「かわたびほっかいどう」の取り組みを推進している。本報告では、札幌開発建設部における令和4年度の取り組みを紹介するとともに、今後の展開に向けた課題や効果的な広報活動の方向性について検討を行った。

キーワード：かわたびほっかいどう、地域交流・連携、自然環境、広報

1. はじめに

国土交通省では、2020年に訪日外国人旅行者数を6,000万人まで増やす目標¹⁾を掲げており、北海道開発局では世界水準の観光地の形成²⁾を図ることを第8期北海道総合開発計画の目的の一つとして位置づけている。北海道開発局の河川部門では、四季折々の川の自然環境や景観、水辺の活動やサイクリング走行環境等の川に関する情報を効果的に発信し、地域住民や観光客の水辺利用や周遊をサポートする「かわたびほっかいどう」プロジェクトを平成29年度からスタートした。「かわたびほっかいどう」WEBサイト³⁾では、全道の水辺イベントが集約、広報されている。本取り組みは、単なる観光情報配信だけではなく、地域キーマンとのネットワークを通じた河川空間の魅力アップと水辺利活用の促進を重要視しており、北海道らしい持続的な地域づくり・観光振興に貢献することを目指している(図-1)。本報告では、令和4年度の取組を紹介するとともに、今後の展開に向けて効果的な広報活動の方向性について検討した。



図-1 かわたびほっかいどうの概要

2. 地域の団体と連携した取組事例

札幌開発建設部管内の河川では、過去から地域住民や団体による活動がなされ、現在では「かわたびほっかいどう」に結びついている事例が多い。これらの事例について紹介する。

(1) 河川協力団体との連携

令和5年1月現在、札幌開発建設部では10の河川協力団体⁴⁾が指定されており、各団体の活動計画に基づき河川管理に寄与する活動を自主的に行っている。河川協力団体は、平成25年6月に公布された「水防法及び河川法の一部を改正する法律」において位置づけられた制度である。団体は国から指定を受けることで社会的な信用度が向上することや、活動に河川管理者の協力が得られやすくなるなどのメリットがある。ここでは3団体の活動内容を紹介する。

① NPO法人ふらっと南幌によるフットパスツアー

「NPO法人ふらっと南幌⁵⁾」は平成21年4月に設立、平成27年3月に指定された団体である。南幌町及び周辺市町村の住民とともに地域を流れる夕張川を中心として、過去から地域資源である歴史遺産や自然環境を活用した月例フットパスや河川清掃の実施、幌向地区自然再生事業での取組にも積極的に参加している。また、近年では千歳川遊水地群の完成を契機に、河川堤防や千歳川遊水地群、幌向運河などを活用したフットパスツアーなどを管轄の江別河川事務所職員と連携して実施している。図-2に令和4年7月10日に開催された「幌向湿原再生の喜び」の開催ポスター、写真-1に開催当日の写真を示す。本イベントには30名の参加があり、参加者からは「ミズ

ゴケ里親となりミズゴケ再生地から株分けしたミズゴケを自宅で増やし、毎年参加して現地で植え込みするのを楽しみにしている」「屋外コンサートがとても素敵だった。馬頭琴やケイナの演奏やアイヌ語による歌謡が幌向自然再生地の景観と相まって素敵だった」などの感想が得られている。



図-2 開催ポスター



写真-1 当日の様子 (左：喜びの歌、右：湿性植物移植体験)

② NPO法人三笠森水遊学舎によるラフティングツアーサポート

「NPO法人三笠森水遊学舎⁶⁾」は平成18年1月に設立、平成31年3月に指定された団体である。地域を流れる幾春別川において、管轄する岩見沢河川事務所職員と連携して河川清掃や植樹活動を行っている。また、地元の三笠ジオパークと連携してラフティングツアーのサポートスタッフとしても活動している。写真-2に令和4年7月に開催されたラフティングツアーの様子を示す。当日は11名の参加があった。三笠には幾春別川流域の地形の成り立ち、炭鉱、石炭、地層などを学ぶことができる野外博物館があるほどであり、本ツアーではラフティングを通して河岸の地層など自然観察を楽しむことができる。本イベントの参加者からは、「このツアーで自然と共存していることを実感できた」「自然の力の中では、人間は無力だと感じた。自然の流れに身を任せることも大事だと体感できた」などコメントがあった。



写真-2 ラフティングツアーサポート

USUDA Chikara, MURAKAMI Yasuhiro, WATANABE Motoyuki

③ 石狩川下覧権による水上体験学習 in 砂川遊水地

「石狩川下覧権⁷⁾」は、平成8年に設立、平成26年3月に指定された団体である。過去から地元砂川遊水地管理棟や周辺を流れる石狩川を活用し、札幌開発建設部や空知シーニックバイウエイ、商工会議所など数多くの団体と連携し、川下り体験や遊水地管理棟付近の駐車場を活用したイベントを実施してきた。近年は新型コロナウイルスの影響を受けイベントを開催できなかったが、令和4年度は遊水地を活用した水上体験学習を「かわたびほっかいどう」と連携して3年ぶりに実施することができた。写真-3に令和4年7月22日に開催された際の様子とポスターを示す。



写真-3 開催ポスターと当日の様子

(2) かわたびほっかいどう関連団体との連携

「かわたびほっかいどう」を推進するなかで、各地域のイベントやツアー情報を収集することで、過去から継続的に実施されている取り組みがすでにかわたびほっかいどうと連携できるポテンシャルを有していることが分かった。ここでは各取り組みと札幌開発建設部が連携し、かわたびほっかいどうをPRすることができた事例を紹介する。

① CHITOSE RIVER PROJECT2022 (千歳青年会議所、シーニックバイウエイ北海道、支笏ガイドハウスかあ、千歳川河川事務所との連携)

本イベントは元々、一般社団法人青年会議所⁸⁾の50周年事業として、千歳市内を流れる千歳川で2014年から継続実施しているものである。新型コロナウイルスの影響を受けて中止が続いていたが、3年ぶりに今年度、令和4

年7月30日、31日の2日間で開催された（写真4）。当日は会場に飲食ブースが15店舗出店され、テラスの設置、川遊び、カヌー、SUP・ラフティング、スカイランタン等のイベントが2日間にかけて開催された。また、ブースには千歳川河川事務所や、シーニックバイウェイからも出店するなど、河川部門と道路部門が連携できた好事例である。また、同日に会場と隣接した緑地帯において「キッチンカー&マルシェ」「航空自衛隊と陸上自衛隊のアウトドア展示」「Possi.Labo CAMP」も開催されており、多くの来場者で賑わった。



写真4 開催ポスターと当日の様子

② かわまちフェスタ2022（北海道情報大学、江別河川事務所との連携）

本取り組みは北海道情報大学経営情報学部の学生らが主催したイベントで、江別市かわまちづくり事業の実施予定エリアにおいて人を呼び込み、賑わいの創出を目的として開催された。実施に当たっては江別河川事務所および石狩川振興財団とも連携し、7月30日、31日の2日間でEボート乗船体験や札幌開発建設部が管理する調査船弁天丸を活用し、石狩川の歴史や環境、事業内容などを学んでもらうクルージングを実施した（写真5）。



写真5 開催ポスターと当日の様子

③ 石狩川流域圏基幹ルート試走会（石狩川流域圏会議、北海道サイクリング協会、シーニックバイウェイ、かわたびほっかいどうの連携）

石狩川流域圏会議⁹⁾では、「観光」をテーマにサイクルーツリズム取り組んでおり、これまでに「石狩南部・空知南部編」「旭川・美瑛編」「北・中空知編」「石狩川全図編」のルートマップを完成させ、試走会も開催されてきた。令和4年度は、「石狩川流域圏ルート」の受け入れ環境や走行環境等に係る検討を行うため基幹ルートの試走会を実施した。2日間の日程で開催され、1日目は大雪ダムから滝川市役所の148km、2日目は滝川市役所から石狩川河口の97km、合計約250kmの河川堤防上や国道、市町村間などを走破した（写真6）。両日とも走行した参加者からは、「疲労困憊だが達成感が得られた」「景色が良く、快適に走れた」といった感想や、走行環境に対する改善点等様々な意見を頂戴した。

ダウンストリームライド・イン・石狩川 2022

石狩川流域圏基幹ルート走行会

～紅葉の層雲峡から石狩川の河口へ。約250kmを走ろう～

■開催日 令和4年10月9日(日)・10日(月・祝)

■コース 北海道サイクルーツリズム【石狩川流域圏ルート】

■集合 <1日目> ①6:30 JR旭川駅バスターミナル(旭川市) ※大雪山まで移動センターへ移動の方
②8:30 大雪ダム管理支所前(上川町) ※道庁大雪山事務所の方

<2日目> 8:30 滝川市役所(滝川市)

■解散 <1日目> 17:30 滝川市役所(滝川市)

<2日目> 15:40 はまなすの丘公園ビジターセンター(石狩市)

■対象 走行ルート近隣自治体職員・関係者、北海道サイクリング協会

■募集人員 20名

■集合方法 各自上記箇所に集合
※1日目の、旭川からのバスを用意しております。
詳しくは、別紙1・2をご確認ください。

■サポート 両日とも、サポートカーが帯同します。
レンタサイクル(ヘルメット)も用意してあります。

■保険 方が一事故に備え、主催者側で保険に加入します。

★本走行会は、石狩川流域圏基幹ルートの走行環境検証、モニタリング、PRすることを目的として開催します。

【主催】石狩川流域圏会議
【協力】北海道サイクリング協会、空知・シーニックバイウェイ、(一財)石狩川振興財団、(一財)シーニックバイウェイ支援センター
【問い合わせ】(一財)シーニックバイウェイ支援センター (住所: 旭川市) TEL: 011-708-0429 E-mail: info-sc@scenicbway.jp

石狩川流域圏会議
かわたびほっかいどう





写真6 開催ポスターと当日の様子

④ 三笠ジオツアー（三笠ジオパーク推進協議会、岩見沢河川事務所、幾春別川ダム建設事業所との連携）

三笠市にはアンモナイトをはじめとする一億年前の生命の痕跡や石炭という大地の恩恵を受けることができる炭鉱町特有の文化があり、1868年に幌内地区で「石炭」が発見されたことを契機に開拓されたという歴史がある。三笠市は市全体が三笠ジオパークとして指定され、ジオパークの活動としてジオツーリズムや教育活動、保護活動等様々な施策がなされている。ジオツアーは年間20回程度実施されており、かわたびと連携した取り組みについて、令和4年度は写真-7に示す2つのイベントが開催された。



写真7 開催ポスターと当日の様子

⑤ 空知シーニックバイウエイとの連携強化

空知シーニックバイウエイ（以下空知SBW）では、空知管内の特徴がある国道をメインルートとするとともに、南北を縦断する道央自動車道、石狩川、空知川の2つの河川メインルートにしている。このため、河川関係者も代表者会議等に参画し、河川に関する施設や景観等の情報提供するほか、令和2年度、3年度には空知川の川下り、赤平市内の炭鉄港ガイダンス施設見学や芦別市内の観光施設等を巡るテストツアー等も実施してきている。令和4年度には、連携強化施策として、空知SBWスタプラリー（ソラ★スタ2022）の施設に砂川遊水地管理棟を開放した（写真-8）。

USUDA Chikara, MURAKAMI Yasuhiro, WATANABE Motoyuki



写真-8 開催ポスターと当日の様子

⑥ 北海道カメラ女子の会との連携強化

北海道カメラ女子の会は、「北海道に住むカメラや写真好きな女性がいかに緩やかにつながる」場をつくりたいとの思いから2014年に活動を開始した団体である。女性率、SNS活用率100%、会員数600名を超える北海道最大のカメラ女子のコミュニティで、市町村や企業とコラボして様々な魅力を冊子、SNS等で発信している。令和4年度は、かわたびに関するモニターとして三笠ジオパークツアー（ラフティング）、新桂沢ダム見学ツアー、江別河川防災ステーション見学や弁天丸クルーズを取材し情報発信いただいた（写真-9）。



写真-9 情報発信

3. 札幌開発建設部「かわたび運営会議」の開催

「かわたびほっかいどう」実施要綱では、各開発建設部において「かわたび運営会議」の開催が位置付けられている。札幌開発建設部が管轄する石狩川下流域は広範囲であり、支川も含めると河川協力団体やかわたびに結びつく活動を実施している団体が数多くあることが前述の通り理解できる。そこで、札幌開発建設部管内におけ

る各事務所や関係者との取り組み事例やノウハウの情報共有、様々な団体との協力関係の構築及び意見交換を目的として、令和4年度に札幌開発建設部「かわたび運営会議」を初めて開催した（写真-10）。会議は令和4年12月2日に札幌市内の会場で開催し、河川協力団体5団体、かわたびほっかいどう関連団体7団体、札幌開発建設部9課所から計48名が参加し、12団体から発表いただいた。意見交換時における主な意見を以下に示す。

- ・様々な活動がありとても興味深かった。
- ・地域ごとに様々なイベントや楽しみがあって、その川でなければできないことがあると感じている。
- ・画一的なものはないと思う。少し柔らかく考えて地域の意見や個人的要望も含めてできることを考えるようにしたい。
- ・取り組みを継続的に進めるには、この場を通じて関係者で考え、雰囲気づくりをすることが大切だと思う。
- ・官と民が融合するようにしたい。運営会議の発展に期待する。
- ・活動の発表に聞き入ってしまい、各団体が一生懸命取り組まれていると感じた。
- ・川は楽しい場所である一方で、恐ろしい場所だということも伝えていけば防災にも地域振興にもつながる。
- ・会議は有意義な時間だった。官民で活動が広がっていることがよく分かった。
- ・「かわたびほっかいどう」というプラットフォームにいろいろなノウハウが集まると思う。
- ・活動発表だけでなく、日常的に「かわたびほっかいどう」というプラットフォームが機能するようになればよいと思う。



写真-10 かわたび運営会議

4. 現状の課題と解決策

かわたびほっかいどうを推進する上で重要な、地域団体との協働体制を継続、発展させるために現状の課題を整理し、解決策を検討した。毎年度、河川協力団体とは各河川事務所が意見交換会を開催しているところであり、その中で出た意見から整理した課題の一部を次に示す。

(1) 河川の仕組み、河川管理に関する理解が不足

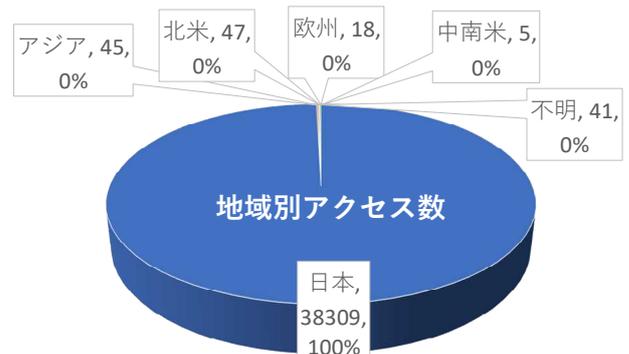
河川協力団体だけでなく、川を使った活動を行う団体が、実は川を利用する際に知っておくべき危険性や対策をよく知らないという現状が見受けられた。川を使った防災、環境活動を行うのであれば、リスクや対策を理解しておく必要があるほか、川の使用にあたっては自由使用の原則や公共物としての法的位置づけも理解してもらう必要がある。今後官民双方で川の特性や河川管理に関する学習の場づくりをしていく必要がある。

(2) いい川イメージの共有

各団体の人材不足や高齢化に関しても問題であるが、そもそも活動や川に魅力が無いと活動に参加したいという動機付けにならない。河川管理者の立場に置き換えればその活動が河川管理に資するもので連携に値するかどうかということである。様々な団体が目的や意識を持って活動している中で、対象とする川のいい川のイメージを再確認する必要があると考える。再確認するためには、河川管理者が協力団体の持つ性格や川への思い、考え方を理解するに加え、協力団体としても活動目標やモチベーションの維持方を再認識するとともに、官民双方のいい川イメージを共有できる場を設けていく必要がある。

5. 効果的な広報活動

かわたびほっかいどうは、川を知ってもらうための情報発信と地域キーマンとのネットワーク促進によって推進することを掲げている。地域のキーマンに関しては、河川協力団体や他部門等との連携により徐々に広がってきていると考えている。情報発信については、かわたびほっかいどうHPにて全道的に集約し広報しているところである。ここで、かわたびほっかいどうHPで掲載している札幌開発建設部の取組に対するアクセス状況について解析を行った（図-3）。令和4年1月から10月にかけてのアクセス数を集計すると、海外からのアクセスが確認されたため、地域別に整理したところ中国・タイ・台湾などのアジア地域が一番多く、次いでアメリカ・カナダの北米地域、最後にブラジル・南アフリカの中南米地域という結果だった。国外からのアクセスも確認されたことから、英文による紹介ページの作成や動画資料も作成してリンクを貼り付けるなど海外向けの対応もしていくような取り組みも、今後必要になるものと考えられる。



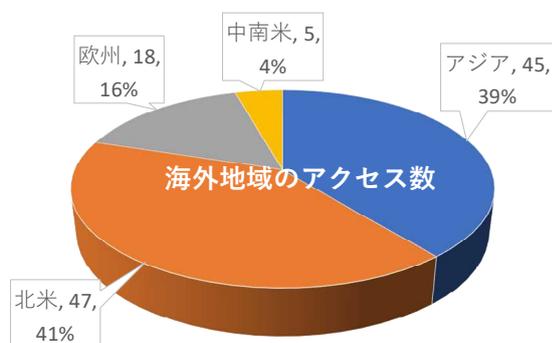


図3 かわたびほっかいどうにおける札幌開発建設部記事の地域別アクセス数（上：全体、下：地域別）

6. 今後に向けて

(1) これまでの取り組み継続

本報告で紹介した河川協力団体やかわたびほっかいどう関連団体との連携は、今後も継続して情報共有を密にしながら継続することが重要であると考えます。

(2) 新たな取り組み

砂川遊水地では厳冬期における湖内のワカサギ釣りが賑わいを見せており、この時期に管理棟の年間利用者数が多い状況である。令和4年度はこのワカサギ釣りイベント時に併せてアイスカルーセルの実施を検討している。管内では夕張シューパロダムや定山溪ダムで過年度に実証実験が行われている。また、砂川遊水地の地元河川協力団体はアイスカルーセルの取り組みに前向きな姿勢であることから、かわたびほっかいどうと連携して進めていきたいと考えている（写真-11）。



写真-11 令和3年度アイスカルーセル

(3) 既存施設や制度の活用

令和3年度より堤防除草におけるコストの縮減や環境負への荷軽減を目的としたヒツジによる放牧除草を試行的に実施している。令和4年度は前年度に比べ頭数と面

積を増やしたところであるが、草が不足した状況も確認された。来年度も実施予定であるが、開始から3年目となるため詳細に効果検証を図りたい。

また、昨今河川行政は防災減災だけではなく、地域の賑い創出にも力を入れている。かわまちづくりや都市地域再生等利用区域制度（特区）など、国の環境整備事業によって地域に水辺と親しみを持てる空間を整備することができる。また、特区指定がなされれば河川敷地内で民間企業が営利活動を行うことが容易となるが、事業者の選定や管理体制の確立にあたっては、協議会等を設立し、公平性・透明性の確保が重要である。

7. まとめ

本稿では札幌開発建設部における「かわたびほっかいどう」の取り組みを一部紹介した。これら取り組みは地域団体の活動や団体との連携が基本となっているが、単にツアーやイベントを開催するだけではなく、連携を継続することや取り組みが地域に浸透することで、水辺の賑わい創出や地域振興へ繋がるものと考えている。また、新型コロナウイルスの影響により中止にしていた活動が徐々に再開し始めている。また、外国からのかわたびほっかいどうHPへのアクセスや観光客数が増えている状況もあり、今後は外国人向けPRにも目を向けていきたい。水辺にはその地域特有の資源が眠っており、その使い方により新たな価値を生み出す可能性も秘めている。さらに、道路部門の取り組みである「シーニックバイウェイ」や農業部門の「わが村は美しくー北海道」運動とも連携し、関係機関や地域のキーマンとのネットワーク構築を広げていくことで魅力的な川に関する情報や魅力的な水辺空間の創出、利活用の促進を図っていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 国土交通省官公庁 (2020) : 観光ビジョン実現プログラム 2020—世界が訪れたくなる日本を目指して—, <https://www.mlit.go.jp/kankochu/content/001353662.pdf> (最終閲覧日 2023年1月4日)
- 2) 第8期北海道総合開発計画;北海道開発局, <https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/u23dsn0000000fqs-att/u23dsn0000000fyf.pdf> (最終閲覧日 2023年1月4日)
- 3) かわたびほっかいどう;北海道開発局河川計画課, https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/kn/kawa_kei/splaat000001brcl-att/slo5pa000000kco.pdf (最終閲覧日 2023年1月4日)
- 4) 河川協力団体;国土交通省, <https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/rcg/01.html> (最終確認日 2023年1月4日)
- 5) NPO ふらっと南幌; <https://flat-nanporo.main.jp> (最終確認日 2023年1月4日)
- 6) NPO 三笠森水遊学舎, <http://ww6.tiki.ne.jp/~h-forest/> (最終確認日 2023年1月4日)
- 7) 石狩川下覧会, <https://www.facebook.com/profile.php?id=100064868040973> (最終確認日 2023年1月4日)
- 8) 一般社団法人千歳青年会議所, <https://chitose-jc.com> (最終確認日 2023年1月4日)
- 9) 石狩川流域圏会議, <http://ishikarigawa.net/index.php/about>